

産大レクチャー ア・ラ・カルト 〈194〉

国連のアントニオ・グテーレス事務総長は今年7月の記者会見で「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化の時代が到来した」と表現した。「地球沸騰化」は、何を意味するものだろうか？例えは地球の平均気温は15度ほどであるが、これが水の沸点である100度まで上昇することはありえない。

この「地球沸騰化」は、今年7月の世界の平均気温が観測史上最高となる見通しから生まれた新しい言葉で、よく言われている地球温暖化よりも一

層レベルの高いものとされている。今年7月の世界の平均気温は、記録のある1940年以降最高の16.95度となった。日本国内でも、東京都心など25の観測地点で7月の平均気温が統計開始以来最も高くなり、都心では平年よりもプラス3.0度の高温を記録するなど猛暑が続いた。

温暖化の影響で夏に高温が続き、集中豪雨になるケースが増加しただけでなく、台風も動きにまで異常が見られる傾向にある。また、従来の地域的な気象パターンも少し

ずつずれ、異常気象の増加が多く指摘されるようになってきている。

85年にオーストリアで開催された初めての地球温暖化に関する会議であるウィラハ国際会議をきっかけに、温室効果ガスによる地球温暖化問題が

97年には、地球温暖化防止を話し合う国際会議である気候変動枠組条約第3回締約国会議のCOP3が京都で開催され、京都議定書が採択された。その後もさまざまな取り組みが継続され、2015年末のCOP21では20

地球沸騰化

注目されるようになっていった。その後、88年には、国連気候変動に関する政府間パネル（IPCC）が設立され、これまでの報告書では、温暖化の大部分は、大気中の温室効果ガス濃度の増加によるものであった可能性が高いと結論づけている。

年以降の地球温暖化対策の新たな枠組みとして、国連に加盟しているほぼすべての国が加入対象、参加国には温室効果ガス削減が義務付けられるパリ協定が採択され、温暖化を防止するための挑戦が本格化した。

しかし、このように全

絹川ゲニイ

世界で富国一体となって温暖化を食い止めるための取り組みがなされているにもかかわらず、地球の温暖化は「地球沸騰化」まで顕著に上昇して来ているのである。地球上の気象は長期間の平均としての気候形成や変動に関

向かって吹いている風のことで、地球の北極・南極の寒さと赤道付近の暖かさとの温度差、地球の自転という二つの原因で吹く。これまでの観測により、温室効果ガスによる地球の温暖化に伴って世界の平均気温の上昇よりも北極の気温上昇が5倍近く大きく、海水の面積も観測史上最も速い速度で縮小していることが明らかになっている。

このような赤道と北極の温度差の変化が偏西風の従来パターンに影響を与え、異常気象に繋（つな）がっているのではないかと推測されている。

また、異常気象の影響は多方面で現れてきており、その影響による気温

の変化は上昇のみならず、一部地域では寒冷化が進んでいるとも言われている。

何といても人間活動による地球環境の悪化は疑う余地はなく、改善のための後戻りができないことに加え、現在進行中のさまざまな努力がこのくらい効果が見られるかという予測も困難である。天気の変化を大きく左右する偏西風の影響が今後一部地域に止まらず変動を繰り返す、世界に異常気象をもたらすと言われている。このような変化の中で「地球沸騰化」も進行していくだろう。

（教授）
毎月1回掲載

韓国・東新大と協定

産大 国際交流13校目



新潟産大（梅比良眞史学長）は韓国の東新大（イ・シヨヒ総長）と連携協定を締結した。産大の国際交流指定校は中国、ロシア、台湾、モンゴル、韓国の5カ国12校あり、今回で13校目。東新大は韓国南西部の羅

ン特任教授とも親交があることなどがきっかけになった。

協定の内容は、産大が附属高でハングル語講座を開校していることもあり、高校生・大学生の韓国研修、交換留学のほか、教職員間の学術交流など。先月27日に締結した。

産大で協定書の調印を終え、東新大のイ総長は「羅州市は人口12万人の地方都市で韓国電力の本社がある。本学も地域との関係を大事にしている」と共通点を挙げ、「学生、教職員が両国の文化を学ぶ機会をつくり、互いに見聞を広げていきたい」と語った。梅比良学長は「東新大は留学生が多くおり、国際性も生かしつつ、交流を深めてい

きたい。人と人が両大を行き交うことがまず第一だが、我々の通信教育課程マナガラも補完的に使うことができると交流発展を願った。

国際交流連携協定を結んだ東新大のイ総長（左）と梅比良学長（右）新潟産大

「新潟大学」 地域に学ぶ 地域を学ぶ —— 史跡活動レポート ——

写真を通して 大学生の視点を

産大写真部では、市内のイベントや県内・市内の自然・祭などの風景写真を撮影し、学内外の写真展で発表しています。フラインガーを通して私たちが感じたこと、共有したいと思った風景を多くの人たちに鑑賞してほしいと思っています。

今年も、工科大写真同好会との合同写真展の開催を皮切りに、本のしお

りに撮影した画像を使ったり、文芸部と共同で写真に合わせた短歌を埋め込んだポストカードを作成・販売したりと写真の可能性を広げる試みを実践してきました。

本写真部OBで全日本写真連盟柏崎支部に所属する田村健さんを紹介もあり、11月下旬に開催された同支部の写真展に、私も含めた部員4人の写真を出品しました。

写真展を通して感じたことは、柏崎に多くの写真愛好家がいること、い

ろいろなテーマを持って写真と向き合っていることがわかったことです。他の出品者の作品を見ながら、露光時間やタイムングで、肉眼でみた瞬間の輝きや感情をつかむことの奥深さ、写真だから伝えられる表情や自然の営みを感じ、撮影への意欲も一層高まりました。

来場された方から写真の説明を求められたり、「こういう撮影の仕方がいいよ」とアドバイスも頂いたりしたことも貴重な体験でした。

今後は「女性のかわいらしさ」をテーマに、じっくり時間をかけ、感動を届けられる「大切な一枚」を撮りたいです。

秋田県出身の三澤隆洋さん(3年)は、御野立公

園から米山と天の川を捉えた「星海」を出品しました。「柏崎を象徴する米山と星空の美しさを感じてほしいです」と撮影時の思いを話しています。今後も地域の方に楽し

んでいただけるような写真展を開催しますので、ぜひご期待ください。
産大写真部部長・阿達舞華
↓
(同大学地域連携センター)



吹奏楽の響き 若さあふれる

市内高校生が
コンサート

市内高校吹奏楽部のクリスマスコンサートが24



市内の高校吹奏楽部によるクリスマスコンサート。サンタの帽子をかぶり、若さあふれる演奏を披露した24日、市民プラザ

日、市民プラザで開かれた。5校の部員65人が若さあふれる演奏を繰り広げた。

コンサートは「Winter Live 2023」として実行委員会が主催。柏崎、常盤、柏崎、産附、翔洋の各校吹奏楽部が出演した。ほかに新潟産大吹奏楽部、市吹奏楽団も参加した。

演奏は行進曲「K点を越えて」をオープニングに、「そりすべり」「ホワイトクリスマス」などを次々と部員らは赤白のサンタの帽子をかぶり、楽しい雰囲気。アンコール曲の「365歩のマーチ」まで息を合わせ、会場の拍手が曲を盛り上げた。

柏崎3年・阿部愛衣さんは「緊張はけれど、大勢の人と音を合わせ、楽しかった。今度は来年2月の定期演奏会に向けて頑張りたい」。柏崎2年・佐藤

実明さんは「こんなに大人気で演奏できる機会がなく、とても良かった。一人一人の音が重なり合い、素晴らしい」と話した。

同実行委の桑野勲・市吹奏楽団団長は「合同練習は合計3時間ぐらいたったが、みんなが一生懸命に心を合わせて演奏した。年に一度、高校生が一堂に集まって演奏できることは大事だ。毎年の恒例行事として続けていきたい」と言い、指揮棒を握った。

「新潟大学」が 地域に学び 地域をふさす

— 定政活動レポート —

県内学生の 発表交流会

新潟大学中央図書館ラ
イブライリーホールで今月
9日、「地域活動・学生
発表交流会」が開催され
た。新潟地域連携コミュ
ニティ主催であるこの交
流会は、平成30年度から
開催(当初は文部科学省
COC+事業として開
始)、コロナ禍でのオン
ライン実施を経て、4年
ぶりに対面での開催が実
現した。

新潟大学をはじめとし
た県内で地域活動に取
り組む大学生14チーム
と、行政や企業の方、高
校生らが一堂に会し、大
学生による地域連携、地
域貢献をテーマに交流
を深めた。本学からはゼ
ミナル単位での地域
連携活動、調査研究に取
り組む3チームが参加
し、これまでの成果を発
表した。

文化経済学科4年の池
嶋菜央さんは交流会の運
営メンバーとして2年間
活躍し、当日は全体の司
会進行も務めた。「オン
ライン会議に初めて参加
した時は、私に運営の仕
事が務まるか不安でした
が、大学の垣根を越えて
協力し合うことで、運営
も他大学との交流も楽し
く充実していました」と
振り返る。

今回初めて参加した経
済経営学科3年の村上翔
琉さんは、「道の駅」を
活用したまちづくりの可
能性についてプレゼンし
た。「他大学の方々がさ
まざまなアプローチで地
域活動を行っていること
を知ることが出来まし
た。ポスターセッション
では、ゼミ内での議論で
は気づけなかった新鮮な
意見をいただいたので、
今後の活動に活(い)か
していきたい」と意気込
みを語った。

今回の交流会で知り合
った新潟大学の複数チー
ムのみならず、2月に
開催予定の産大主催イ
ベント「柏崎冬のフェス
ティバル」への参加に向
けて、現在調整中である。
禁子
△(同大学地域連携センタ

層広がっていくこと期
待が高まっている。
経済学部准教授・地域
連携センター長・権田
禁子
△(同大学地域連携センタ

